

戯作者の筆耕

二 又 淳

はじめに

草双紙は画が主で、文が従のかたちをとる文藝である。江戸中期の青本の時代までは、画工と作者が分業ではなく、画工が文章をも担当していたと推測される。次第に画工と作者が分業となるわけであるが、作者は筆耕を兼ねるのが当然であったようだ。黄表紙の時代に入っても、恋川春町や十返舎一九など、戯作者が筆耕をつとめている例が確認できる。

山東京伝も、考証随筆や読本などで筆耕をつとめている例があり、黄表紙の筆耕も行っていたかと思われる。

合巻の時代には、巻末に筆耕の名が明記されるようになり、作者と筆耕の分業体制が本格的になるもの^①の、この時代でも、筆耕出身の戯作者は数多い。

これまであまり紹介されていないと思われる資料を紹介しつつ、戯作者の筆耕の意味について考えてみたい。

一 丈阿の両面摺年代記

江戸時代を通じて、年代記は数多く出版されている。一年ごとに、歴史上の重要事項が簡潔に記されているのが基本であり、また『大雑書』類の記述を含むものもあった。江戸の人々の知識の源泉であったといってもよい。

携帯に便利なように、江戸中期ごろからは、一枚摺のものも登場する。片面のみものと両面摺のものがあるが、両面摺のものの方が多かった。文化十二年（一八一五）刊の山東京山作合巻『両面摺娘年代記』は、見返しに年代記の袋の意匠が描かれ、題名とともに両面摺年代記の流行を物語る。

両面摺年代記については、長友千代治編『重宝記資料集成』第十九卷（二〇〇八年三月、臨川書店）に、主なものが影印紹介されている。同書の解説『年代重宝記』一枚摺について^②には年表も掲載されている。それによると、寛保二年（一七四二）の「年号重宝記」（裏面「竊永代新雑書」）が、現在確認されるもっとも古

いものであり、このあたりが始まりかとされる。

山崎美成著『海録』巻一・八一には、「両面年代記といふ一枚摺のものは、横山町三丁目燕屋弥七といへる書物屋の初めて作りし也。今は殊に行はる」とあり、長友氏の年表によっても、初期のものは燕屋弥七版のものが多いため、首肯できる記述である。

ここで取り上げるのは、青本期の戯作者丈阿の署名のある両面摺年代記(縦二七・六種・横三六・三種)である(図版1・2)。

表は、右上に「珍永代大雑書／鯨之図入」とあり、曲尺の絵、「古今年号用字」「珍地底鯨之図」「八将神くりやうの事」「男女あししやうの事」などの『大雑書』の記述がのる。左下の匡郭外に「七六翁 丈阿書之「竹菴」とある。

裏は、右上に「年重宝記」とあり、上段に「太平武将略年代宝曆十二年迄」、中段に「くぎやう名僧年数宝曆十二年まで」、下段は天正四年から宝曆十一年までの記載がある年表である。右下の匡郭外に「藤屋伝兵衛買版」、左下の匡郭外に「板元江戸通油町 丸屋甚八」とある。

年代記部分の記述は、宝曆十一年(二七六一)の「御朱印御改六月十二日いへ重公御たかい 惇信いんでんと号 八月万寿姫君様御たん生」までであるので、宝曆十一年に執筆し、翌年新春に刊行されたものであろう。板元丸屋甚八は、藤屋伝兵衛から板株を購入したものと思われるが、詳細は不明である。

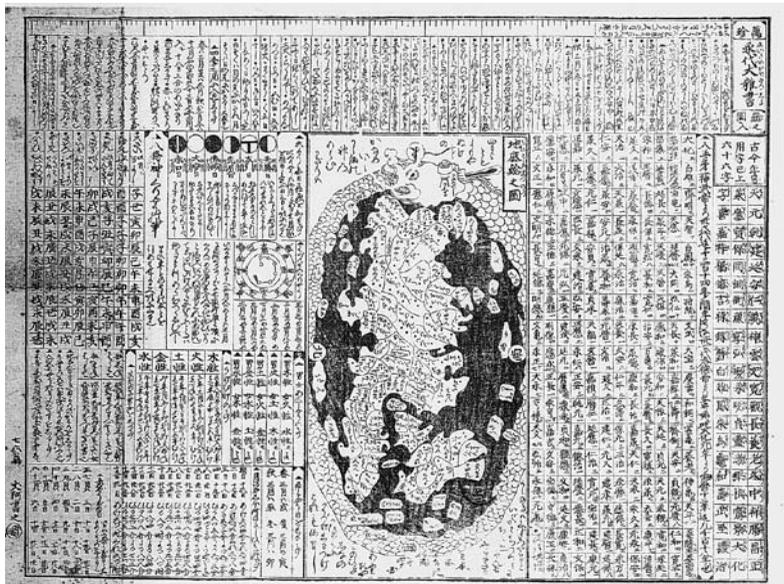
丈阿の生没年ははっきりとしない。明和年間(二七六四～七二)の晩年の草双紙に年齢を記しているものがあるが、ばらつきがあり判断に迷う原因となっている。『日本古典文学大辞典』第二巻

(二九八四年一月、岩波書店)の「観水堂丈阿」の項(小池正胤執筆)には、「大体貞享年間(二六八四～二六八八)生れて八十歳以上で没したか」とある。田中伸「黒本作者丈阿の周辺」(『二松学舎創立百周年記念論文集』一九八七年一〇月、二松学舎)で、丈阿の年齢についての考察がなされ、それを受けて、『日本古典文学大事典』(一九九八年六月、明治書院)の「観水堂丈阿」の項(高橋則子執筆)では、「貞享三年(二六八六)頃～明和八年(二七七二)頃」とされる。貞享三年生まれとするのが定説となつていてと考えてよいだろう。

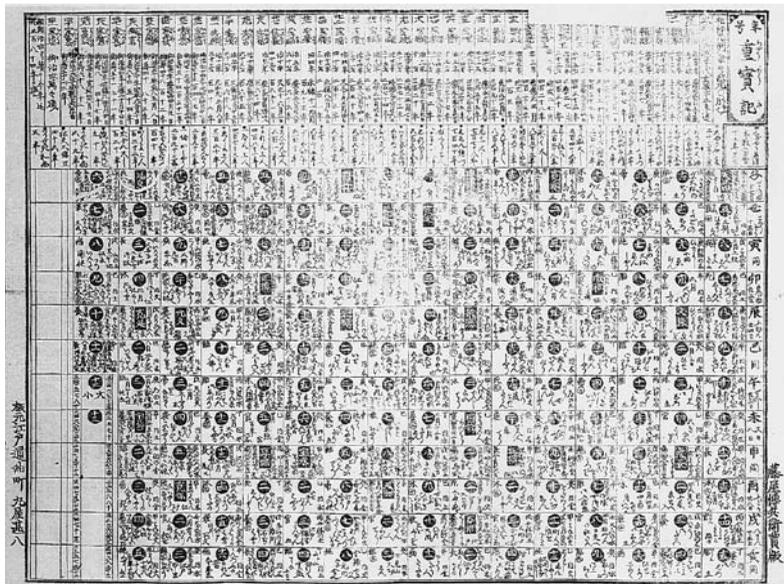
この両面摺年代記が、宝曆十一年の七十六歳の丈阿が執筆したものと考えるならば、丈阿の生年は、貞享三年で問題ないことになる。貞享三年生まれの定説を補強する一つの資料となる。

丈阿の署名のある草双紙の初作は、宝曆十一年刊『倭詞元宗談』であるが、享和二年(一八〇二)刊の式亭三馬作黄表紙『稗史億説年代記』には、「地本やの筆者丈阿といふ人、赤本を作り、作者の名を出さず」とあり、宝曆十一年以前のもので署名のない作品もあると推測されている。ここで「地本やの筆者丈阿」という記述に注目したい。この「筆者」とは版下を浄書する「筆耕」の意である。丈阿は、「作者」としての役割よりも前に「筆耕」としての役割を求められていたのである。版元にとっては、「筆耕」をこなしてこそこの「作者」であったのではなからうか。

佐藤悟「丈阿覚書」(『実践女子大学文学部紀要』第三十二集、一九九〇年三月)では、宝曆三年のものを初めとする、画賛の発句に「丈阿」の印のある役者絵を紹介する。ただし、「丈阿」が画賛の



図版 1 丈阿筆両面摺年代記（表）



図版 2 丈阿筆両面摺年代記（裏）

発句の作者であるかどうかの判断は難しく、佐藤氏も、「丈阿はすべての句の作者ではなく、単なる筆耕であったかも知れず、筆耕として印を押しした場合もあるのではあろう」とする。

丈阿の両面摺年代記に立ち返ってみると、「七六翁 丈阿書」との署名があるので、丈阿は筆耕の仕事をしただけであつたろう。表面の「大雑書」や、裏面の年代記の内容も、先行の文献の記述をリライトしたものであつて、丈阿がどの程度関わつたものかわからない。ここで求められたのは、「作者」丈阿の個性ではなく、「筆耕」丈阿の技量そのものでしかなかつたと思われる。

二 十返舎一九の筆耕

享和二年（一八〇二）刊『膝栗毛』初編の大当りによつて、流し作者となつた十返舎一九は、絵心があり、筆耕もこなせたため、版元にとっては便利な作者であつた。一九ひとりで、版下作成までの作業が終わるのである。十返舎一九は、画工兼作者の時代の戯作者と同じ作業をしたのであつた。あるいは丈阿と同様に、筆耕出身の戯作者であると考えてもよいのかもしれない。

葛屋重三郎の食客となつていた一九は、版元に頼まれた仕事は何でもこなした。曲亭馬琴著『近世物之本江戸作者部類』（木村三四吾編、一九八八年五月、八木書店）には、「錦絵に用る奉書紙にドウサなどをひく」とともに、「書賈等に愛せられて、暇ある折、他の臆草紙の筆工さへして」と記される。

日本古典文学全集『東海道中膝栗毛』解説（中村幸彦校注、一九七五年二月、小学館）には、「江戸に来て葛屋に寄留すれば、い

くらでも口のあろう、貸本屋の筆耕や、版下書きをその頃からしていたのである。刊年不明ながら、西村屋与八刊で、『男女一代いろはうらなひ』の一九版下のものを（無署名ながら歴然としている）見たことがある」とある。無署名の『男女一代いろはうらなひ』は未見であるが、ここでは、十偏斉筆の『三世相』を取り上げてみる（図版3）。

中本一冊、全十二丁で題簽を欠く。書名は柱題による。内容は「三世相十二支生年善惡之事」から始まり、「四季四皇帝之占」・「十二うん吉凶の事」で終わる。一般的な雑書の『三世相』と大きく異なるところはない。末尾に「十偏斉筆」と小さく記され、「地本問屋 永寿堂 御江戸馬喰町二丁目角 西村屋与八再版」とある。ところどころに挿入される絵も、一九自身の手になるものである。刊年は不明ながら、「十偏斉」の署名により、寛政後期かと推測する。

この『三世相』も丈阿の両面摺年代記と同様、作者の個性は必要のない出版物である。寛政後期には、一九はまだそれほど有名な作者ではなかった。「十偏斉筆」の署名の小ささからも、戯作者の盛名で本を売ろうとする姿勢は見とれない。一九はただ単に、筆耕の仕事をしただけであり、西村屋与八も、一九の名で本が売れるとも思っていなかつたろう。中村氏が取り上げる無署名の『男女一代いろはうらなひ』も、その考えを裏付ける。

寛政十年（一七九八）には両面摺「本朝画家系同印譜」^{（五）}（縦二六・七糎・横三七・五糎）の筆耕もつとめている。この両面摺はさまざまな版種があるようであるが、一九筆耕のものは未紹介と思われ



図版3 十偏齊筆『三世相』

る。

表は、「本朝画家系同印譜」「後藤家系譜」が収録され、右下の匡郭外に小さく、「十偏斉一九写」とある。左の匡郭外には、「寛政十戊午年九月吉日再刻 東武地本問屋 馬喰町式丁目 永寿堂 西村屋与八再版」とある。

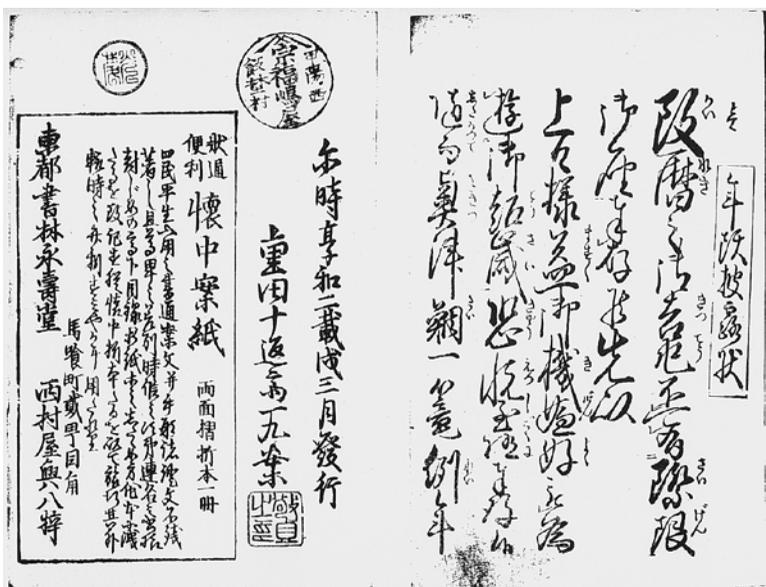
裏は、「狩氏画工道統并印譜」「狩野免許門人系」である。

両面摺「本朝画家系同印譜」の「十偏斉一九写」の署名は見落としてしまいそうなくらい小さいものである。これも一九の名を打ち出そうとしたものとは思われない。

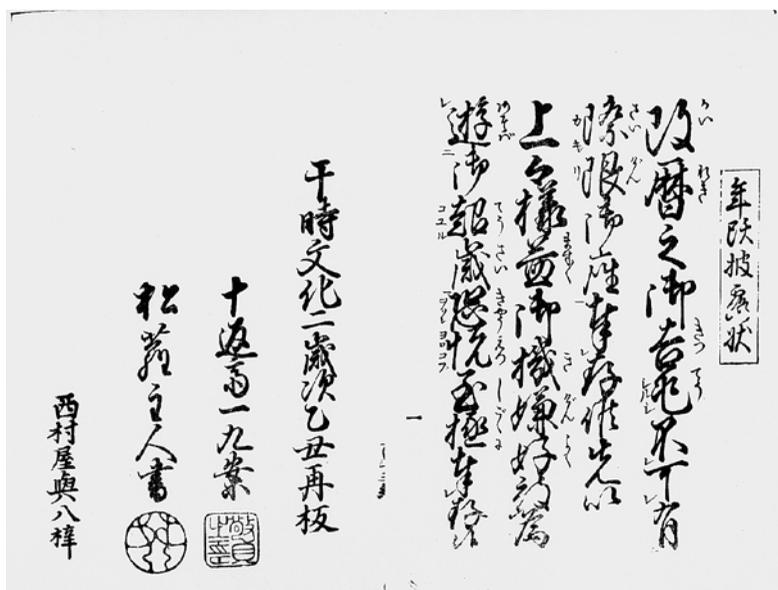
享和二年三月刊の『讀撰手紙之文言』は一九案文の手紙の Handbook としてよく売れたものであるが、初版本はそれほど多く残っていない。

享和二年の初版本は、見返しに「重田一九大人案書」「東都書林 西村永寿堂梓」とあり、巻頭の「年頭披露状」から巻末の刊記に至るまで、すべて一九自筆版下である（図版4）。文化二年（一八〇五）刊の再版本（図版5）は、見返しから刊記に至るまで、すべて新しく彫り直される。見返しに「十返舎一九撰／松羅堂書」「西村永寿堂梓」、巻末には「十返斎一九案／松羅主人書／西村屋与八梓」とあるように、一九の版下から書家の松羅堂の版下へと変わっている。巻末に備わる西村屋の広告には、「御家流手紙之文言」として掲載されている。

享和二年三月は、『藤栗毛』初編の刊行直後である。一九の人氣もだんだんと高まっていく時期であり、それにつれて、『讀撰手紙之文言』も大いに売れたものであろう。図版で掲載した享和二



図版 4 享和二年刊『手紙之文言』1才・刊記



図版 5 文化二年刊『手紙之文言』1才・刊記

年の初版本も、それほど摺りのよいものではなく、版木の摩滅がうかがえる。ほどなく再版となるわけであるが、一九の戯作者としての名を前面に出すならば、あるいは一九の筆跡を求める読者が多いならば、そのまま版下で再版してもよかつたはずである。そうしなかつたということは、初版で一九の版下を用いたのは、経費節約のためであつたのであろう。

一九は、作者として求められた筆耕をこなして、『讀手紙之文言』を執筆した。それが予想外に売れたため、版元は商品価値を高めるため、御家流の松羅堂に筆耕を依頼したのであろう。版元にとつては、作者の自筆は付加価値を生む特別なものではなかつたと思われ⁽⁶⁾る。

三 恋川春町・山東京伝の筆耕

版下を自ら手がけるのは十返舎一九ばかりではない。

安永四年（一七七五）刊の黄表紙『金々先生栄花夢』は、序文・本文とも、恋川春町の特徴ある文字（の）の字に顕著である）で記されている。その後の春町が関わつた黄表紙も、やはり春町自身が筆耕をつとめているものが多いようだ。

また、山東京伝の文化元年（二八〇四）刊の考証随筆『近世奇跡考』は、京伝自身が筆耕をつとめている。近時、『近世奇跡考』の草稿本が、バリの裝飾美術館付属図書室に所蔵されていることが確認され、クリストフ・マルケ「フランスに渡つた京伝『近世奇跡考』の草稿本」（『江戸文学』第三十五号、二〇〇六年一月、ベリかん社）には、草稿本の図版が五葉掲載されている。草稿本と

版本『近世奇跡考』を比較すると、版本の版下も京伝の手になることが容易に理解できる。

大高洋司編『優曇華物語』解題（読本善本叢刊、二〇〇一年八月、和泉書院）で、「版下にも、『近世奇跡考』と同じく、京伝その人の筆跡とも良く似た、細身で右上がりの字体で書かれた丁が多く」と指摘される通り、文化元年刊の読本『優曇華物語』の版下は、『近世奇跡考』の版下とよく似た丁が多い。検討してみると、本文は、巻之一・二と、巻之三・四・五下の筆耕は異なっており、京伝の版下部分は巻三・四・五下の部分となる。また、巻之一の口絵の人名部分・総目録、巻之五下巻末の広告から刊記部分までも、京伝の版下と見てよいと思われる。

『優曇華物語』の版下の違いが何を意味するのかわからない。版元が急いで本作りをした現われであつたろうか。けれども、京伝といえども作者の仕事のみならず、版下の筆者（筆耕）の役割を担つていたことは確かである。

『近世物之本江戸作者部類』巻頭の目録には、「筆工はむかしより寛政享和の比まで、その姓名を署せしものなし。文化に至りて読本甚しく行はれしより、その書の編左に、筆工と彫工の名さへ録することになりたり」とある。黄表紙は十丁・十五丁ものが多く、筆耕の間隔はそれほどかからないが、読本は百丁を超えるものが普通であるから、筆耕に頼み、筆耕名を出すのが通例になつたのだろう。

京伝の黄表紙で、筆耕がすべて京伝自身であつたのかは断言できない。

天明五年（一七八五）刊の山東京伝著の両面摺『廓の雅室』（『山東京伝全集』第五卷月報、二〇〇九年七月、ベリかん社）は京伝の筆耕になるものであろう。これから考えると、丁数の少ない黄表紙の場合、京伝筆耕の作品も多かったものと思われる。

四 晋米齋玉粒の両面摺年代記

文化・文政期の典型的な筆耕出身の戯作者に、晋米齋玉粒（藍亭晋米）がいる。『日本古典文学大事典』（棚橋正博執筆）では、「もと筆耕を業とし、文化一〇年（二八二三）頃より筆耕者として合巻に名を見る。文政期に入ると、歌舞伎俳優の合巻代作者も兼ねて、その作風は歌舞伎調が色濃いとされる。

文政二年（一八一九）刊合巻『化物念代記』（西宮新六版）は、巻末に「藍亭晋米作」とある。一丁オモテには「新板化物念代気」として、十二支を化物に置き換えた絵をのせる。本文は「天怪」「二二」「怪異」「二二」「三」「四」などと始まり、年代記の年号部分のパロディーとなつている。続いて「男女魔性あいしやうの事」「魔性名頭字」「六妖精の事」「化抜を知る事 うけむけのこじつけ」なども、「大雑書」的な記事のパロディーである。六丁ウラから九丁オモテまでの上部には、見越入道の首が長く伸びているが、その首には物差しが目盛りが刻まれる。これも両面摺年代記（冊子の年代記にもある）の上部によく見られる曲尺の目盛りを模したものである。「しんぞう深底急作之図」で物語を閉じる。⁹⁾

晋米齋玉粒は筆耕を業としていたので、「大雑書」類や年代記

類の筆耕も行っていた。合巻『化物念代記』は、晋米齋玉粒にとつては、ふだんの仕事で馴染み深いもののパロディーにすぎなかったのである。

文化十五年（二八一八）三月、西宮新六刊『百人一首』（仮題、図版6）の奥付には、「十二支並十二月の和名」「知死期時くりやう」「うんくわう日の事」「不成就日」「願成就日」という、曆の諸事項が記され、末尾に「書生 藍亭晋米齋校正」「文政元戌寅春三月吉日再鐫」「書舗 地本錦絵双紙 義太夫正本抜本 問屋 江戸橋通材木町一丁目 春松軒 西宮新六藏板」とある。合巻『化物念代記』とは板元も同じである。「新板化物念代気」と「十二支並十二月の和名」の類似は一目瞭然である。

文政二年以前の晋米齋玉粒筆耕の年代記は管見に入らないが、晋米齋玉粒の署名のある文政七年の両面摺年代記（縦二六・三種・横三五・六種）がある（図版7・8）。

表は、右上に「増補永禄年代記」とあり、上段に「泰平武将年数文政七申迄」、中段に「こよみ中だんつかひやう」「一家一門九族服忌令之図」「六囉探やう」など、下段に「男女相性善悪の事」「有封無封を知る事」「大不成就日」などの記述がある。

裏は、右端に「人皇の始め神武帝より三十七代孝德帝迄千三百四年の間年号なし。大化元乙巳年より永禄六年迄九百十九年なり」とあり、永禄七年より文政六年の「天王寺太子系かういんにて開帳」までの年代記の記述である。左下には「江戸 晋米齋玉粒校書」「書林 江戸深川佐賀町 伊藤与兵衛改板」とある。表面の記述とあわせると、文政六年に執筆、文政七年の新春に刊行

されたものであろう。これも『化物念代記』との類似はいうまでもない。

晋米斎玉粒は、筆耕と作者との分業体制が本格的に区別された時代に、筆耕の分野でも作者の分野でも両面で活躍した。晋米斎玉粒自身も、作者に対する特別な意識はなかったと思われる。版元から与えられた仕事をこつこつとこなす、伝統的な作者と考えるとよいのではないだろうか。

おわりに

作者とは、いったいどのような役割を求められたのだろうか。はじめは江戸の作者たちは、文章を書くだけではなく、筆耕もこなすのが当然ではなかっただろうか。丈阿は草双紙の作者署名をした最初期の人物として知られているが、版元にとっては、第一に筆耕であり、その上での作者であったのだろう。

黄表紙には、筆耕名が記されているものはない。無署名であっても、版元ごとに専属の筆耕がいたとも考えられる。しかし、十返舎一九・恋川春町・山東京伝の例を考えると、作者が筆耕を兼ねていた場合が多かったのではないかと思われる。またそれが作者の役割であったのではなからうか。合巻時代の晋米斎玉粒は、筆耕出身であるが、それは特別なことではなく、伝統的な作者像であったのだ。

草双紙の作者は、下絵もすべて自分で描く。画工が作者を兼業していた時代から変わることはなかった。画工をも兼ねた恋川春町は、『金々先生栄花夢』を始めとする一連の黄表紙で、おおむ



図版6 文政元年刊『百人一首』

ね自身が筆耕をつとめていた。自画作の黄表紙が多く、自ら筆耕もつとめた十返舎一九は、まさに赤本以来の、草双紙の伝統的な戯作者像を体現していたといえるだろう。

草双紙は、絵・文章、その上に文字・筆耕をも含めた総合的な文藝ということができよう。その点では、絵と文章と筆耕をもこなすことが、本来の戯作者の役割であったのではなからうか。

注(1) 合巻の筆耕については、金井圭太郎「草双紙の筆耕」(『江戸文学』第三十五号、二〇〇六年一月、ペリかん社)に詳しい。

- (2) 他に両面摺年代記に触れている文献として、長友千代治「重宝記年表稿」の「江戸期一枚物の部」(『重宝記の調方記 生活史百科事典発掘』二〇〇五年九月、臨川書店)、佐藤悟「両面摺年代記小考」(高木元編『研究プロジェクト報告書 第一三三集 近世出版文化史における「雑書」の研究』二〇〇六年三月、千葉大学大学院社会文化科学研究科)、加藤良輔「山東京伝の見た出版の世界——『御存商売物』の年代記・塵劫記・道化百人一首——」(太田昌子編『江戸の出版文化から始まったイメージ革命 絵本・絵手本シンポジウム報告書』二〇〇七年三月、金沢芸術学研究会)がある。
- (3) 文政三年(一八二〇)〜天保八年(一八三七)執筆の随筆。引用は、『海録』(一九一五年一月、国書刊行会)による。
- (4) 井上隆明(編)『近世書林板元総覧』(一九九八年二月、青裳堂書店)では、この時期、京と名古屋に藤屋佐兵衛がいるが、どちらか不明。あるいは江戸にもあったか。また、丈阿署名のもので、明和七年刊の両面摺年代記(丸屋甚八板)が、佐藤悟「両面摺年代記小考」(注2参照)で紹介されている。

- (5) 早稲田大学図書館蔵本と架蔵本を確認。
- (6) 十返舎一九著の往来物は数多いが、一九自筆のものは限られてい

る。小池正胤「戯作者の側面——十返舎一九の往来・案文のもつ意義——」(『国文学言語と文芸』第四十六号、一九六六年五月)参照。

- (7) 『近世奇跡考』の草稿本の詳細については、佐藤悟「パリ装飾美術館図書館所蔵『近世奇跡考』草稿本メモ」(『日本・中国・ヨーロッパ文学における絵入本稿の基礎的研究及び画像データ・ベースの構築』二〇〇六年三月、実践女子大学文学部)も参照。

- (8) この時期の筆耕出身の作者として、晋米齋玉粒のほかに、橋本徳瓶・岡山鳥・曲山人などがある。岡山鳥については、高木元「岡山鳥著編述書目年表稿——化政期出版界における「雑家」——」(『江戸読本の研究 十九世紀小説様式攷』一九九五年一〇月、ペリかん社)、曲山人については、水野稔「曲山人考」(『江戸小説論叢』一九七四年一月、中央公論社)が詳しい。

- (9) 「『化物念代気』と『深底急作之凶』は、アダム・カバット『妖怪草紙 ぐずし字入門』(二〇〇一年七月、柏書房)の基礎編1で図版紹介されている。

- (10) 長友千代治「年代重宝記」一枚摺について、文政六年までの年代記の摺刷をもつ、「藍亭晋米齋書」の「改訂年号重宝記」(『改訂改訂大雑書』、西村源六・近江屋新八・鶴屋金助・丸屋文右衛門板)がのる。

- (11) 金井圭太郎「化政期合巻の筆耕たち」(『共立女子中学校研究報告』第二十八号、二〇〇四年三月)は、作者のほかに、化政期の例より、絵師や板元が筆耕を兼ねていたかと推測する。同氏「化政期合巻の筆耕たち 補遺・訂正並びに作品名一覽」(『共立女子中学校研究報告』第二十九号、二〇〇五年二月)は化政期合巻の筆耕についての詳細なデータを提示する。

- (12) 草双紙のみに限らず、江戸の版本はすべて文字が存在する。活字本では失われてしまう情報であるが、江戸の人々は文字をも含めて味読していたのは当然のことである。